



どいませんでした。(寝ていると激怒されるとのことらしく、さすが…) 自分の研究とあまり関連がないと学生さんは質問しないことをよく経験しておりますが、学生さんは自分の問題のように質問していたことがとても印象的でした。また、最後のシメとしての加納先生のコメント・質問は、学生さんの研究のベクトルを、その長さ(努力)は評価し、方向性はあらぬ方向に行ってしまうように修正をかける本店の大將の風格があったことも付け加えておきたいと思ひます。「この話はあとでしましょう」という終わり方を何度かされておりましたが、(お忙しいので)きっともう後はないんだらうな、学生さんもっと粘って!と応援したくもなりました。他人の研究は全員がわかるわけでもないし、前の研究会の結果を記憶しているわけでもないで、少しやさしいところから質問を始めて(意外にこれがとても重要な時がある)くれる先導役の人がいたらありがたいなー!と思ひました。スライドが少ないと失敗実験のことをあまり話できないので、それもあわせて聞きたいと思ひた次第です。

セミナー終了後、研究室でスタッフの方の写真とラストサムライならぬラストポーラログラフィスト(ポーラロで学位をとったのは最後の学生ということらしいです。)である加納先生とポーラログラフ1号機の写真(写真2)を撮らせて頂きました。農学部スペシャルドリンクで喉をうるおしたあと、白井先生に実験室を案内して頂きました。実験室は、二階と三階の計6~7室からなり、かなりひろく感じました。まず、膜系の電気化学測定装置を見せて頂きました(写真3)。pAレベルの電流値の計測と膜・チャンネルの安定性に苦労されているとのことでしたが、装置の手作り感によりそれとなくご苦労がわかりました。電気化学(電気分析化学)の研究室のなかで、加納研究室の特徴はなんといっても農学部の強みである酸化還元酵素(特殊な酵素を見つける研究室がお近くにがあると聞いております。)を生産し、遺伝子的に変異をおこさせた酵素等で比較するという点にあると思ひますが、それらの装置を見せて頂きました。これらの研究には極めて疎い訪問者には、これまで全く見たこともない装置が多数あり、ゆっくり説明して頂く時間もなかったので残念ではありましたが、先代の先生方や卒業生・現役生の皆様の血と汗と涙をそこに垣間見たような気が致しました。電気化学測定装置(ポテンショスタット)はほぼ学生に一人一台あり、さらには多数の分光電気化学測定装置、回転電極測定装置、自作装置用のポール盤等の工作装置も大変印象深く拝見しました。

その後、「天寅」での宴会となだれ込んでいったわけですが、その様子は写真4を見て頂ければ、その楽しさが想像できると思ひます。

「本店」で何を見たのかと改めて再考すれば、研究室の先達の方々が築いた「測定装置の自主開発」とそれに必要な極めて具体的な動作・測定原理・物理化学・数学的なハンドリングの追求を強固なベースとし、それを電気化学測定の解釈に発展させ、農学部的な強さをもつ生物と電気化学を融合させ、生物電気のトップランナーとして走っておられる姿を拝見できたと思ひた次第です。



写真2 The last polarographist hugged the first original polarograph (partially restored) in his office.

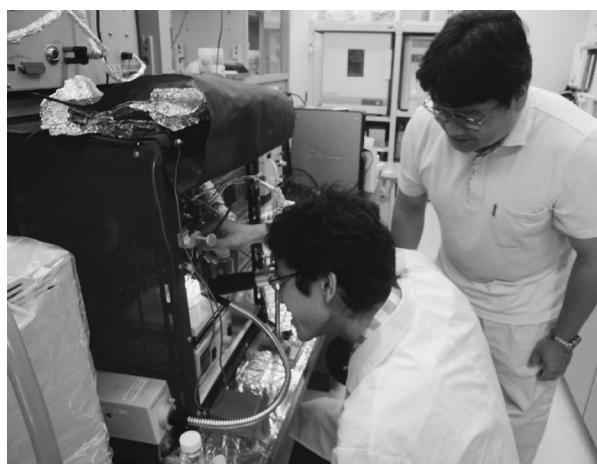


写真3 生体膜中のチャンネル透過電流の測定



写真4 研究室宴会の集合写真(ほんとうに楽しそうですね。あっ、世界征服する方が一番高い所におられます。)

今後の新展開としてはより分子論に立脚し、なぜそのようになるのかという原子・分子・電子レベルでの研究のことも視野にいれて頂ければ、これはもう最強の研究室になるのでは思ひつつ、京都の地を後にしました。

(甲南大学理工学部機能分子化学科 山本雅博)